北方山草(38): 43-50, March 2021

湿原・湿地への招待　2020

雨竜町　佐々木　純一

今年の湿原・湿地巡りもたくさんの出会いと喜び、未知との遭遇がありました。季節ごとに移ろう花暦、一度に全部見たいと欲張りますが、春には春の、秋には秋の一期一会です。

北大の冨士田先生が代表で、2020年3月に陸域湿地部分が1ha以上を対象として全国湿地データベースを公開(URL: http://wetlands.info/tools/wetlandsdb/wetlandsdb/; 2020年5月11日確認)、北海道の湿地は泥炭地湿原、沼沢地湿地、湿地林、湧水湿地、塩性湿地など203湿地群をリストしています。これまで観察した湿地はまだ130余り、希望の30箇所ほどをカレンダーに記入したら、ほぼ家にいない無謀な計画となりました。大雪山の山奥､渓流を詰めて、チシマザサを数時間漕いで、なんて無理です。楽しめる範囲で未踏の湿原巡りを続けます。

来馬湿地(らいばしっち)　(黒松内町)

黒松内町と言えばブナ林と歌才湿原、でも湿っ地人はここも訪ねよう。朱太川の支流、来馬川に由来する来馬湿地で、2011年に当地を訪ねた東大の鷲谷教授(現中央大学)が名付けた湿地です。北大の冨士田先生によると、開拓農家の放棄地に湧水により成立した二次植生湿地で(冨士田2016)、鉱質土壌湿地(湧水湿地)と呼ばれる道内では数少ない湿地形態で、歌才湿原や静狩湿原とは異なるタイプの湿地です。

分け入ると湧水で湿潤した砂礫地から緩斜面に湿性草原が続き、その先に沼があります。時はまだ春ですがモウセンゴケ、ミツガシワ、タチギボウシ、ゼンテイカ、ヒオウギアヤメ、サワギキョウ、エゾリンドウ、ミズオトギリ、イワノガリヤス、ミズバショウ、ヒメシダなどにウロコミズゴケなどが生育中。秋に再訪、湿性草原や泥湿地でヒロハノイヌノヒゲが(図1)、沼畔でエゾホシクサのホシクサ科植物とムラサキミミカキグサが開花中で、二次植生でも役者は十分な来馬湿地です。

春は歌才と静狩の両湿原で芽生えを、秋の静狩湿原ではムラサキミミカキグサが数万個体オーダー、シダのヤチスギランが胞子嚢穂を立てています(図2)。秋の草もみじの頃に開花する花たち、オータムエフェメラルと呼びましょうか、小さな植物群を探しました。

まだ春でした、道東の湿原巡り

5月末の初夏なのに道東の釧路、別寒辺牛、霧多布のラムサール条約湿地はまだ春でした。釧路湿原の温根内湿原へ、ハナタネツケバナ(アブラナ科)との出会いのために(図3)。ヨシ原とスゲ類の若葉の中にポツンと、茎も複葉も細いのに4花弁の白い花だけが大きい、釧路湿原の春を告げる花。

霧多布湿原もまだ目覚める前の荒涼とした枯れ湿地。二代目谷地坊主大王に謁見し